

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。

CSEAS
京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」



朽木フィールドステーション

下切カブの早期開花

朽木FS 黒田末寿

2月28日にヤマカブラが開花した!

カブの採種法である下切について何度も書いてきた。今回、次の結論で区切りをつけたい。

「下切によってカブの開花が早くなり、交雑する *Brassica rapa* 種の野菜が開花しないうちに咲くので交雑せず、品種の特性が保たれる。下切法は根拠のある採種法である。」

昨年11月2日に下切して鉢に植えたヤマカブラ3個体のうち、

中央の個体だけがよく育ち、2月初旬にトウ立ちして中旬の暖かい時期につぼみが膨らみ、寒波で脚踏みしたが、月末28日に開花した。3月7日には脇枝の花も咲き始め、10日現在で満開に近く見えるほどになっている(写真1,2,3)。庭には別の鉢にほうって置いた下切個体がやはり花をつけているだけで、下切しないで鉢植えたヤマカブラはまだ堅いつぼみ状態、シロカブは花芽も見えない。

京都市の左京区・上京区の野菜畑を回っても、花は全く見えない時期である。

開花が早まった条件の吟味

開花が早まる要因には、陽当たりのよさや温度の高さが考えられるが、下切3個体の鉢Aと下切していない2個体の鉢Bは並べていたし、Bはプラスチックプランターを2重にしていたので、これらは関係ないといえる。おもしろいのは、庭隅の陽当たりが悪い場所にほうっておいた下切個体も早咲きしていたことだ。

そばの下切していない個体はまだ蕾だった。つまり、陽当たりの良し悪しは関係なく下切3個体は早咲きした。むろん、これで下切の効果を「実証した」とするには実験個体が少なすぎるが、冒頭の結論の蓋然性は高いといえる。

京都市の気温データを参考に載せておこう(図1)。京都地方気象台は、京都市のJR嵯峨野線円町駅近く、西大路太子道東入にあり、銀閣寺近くの私の家より街中にある。したがって、その気温データはより高くてもより低いことはないだろう。この気象台による今年の梅の開花日(5~6輪咲いた日)は3月3日で私の隣家の白梅開花日が3月2日。今年は2月が寒かったのも、昨年より20日遅い。

ところで、鉢Aに植えた下切個体は3個で、結局真ん中の小さなカブだけが育って花が咲いた。両端に植えた大きな個体も半分ひからびた個体も、1月から成長が止まり萎縮してしまった。浅い陶器の鉢を使ったために冷えて根の伸長が阻害された可能性がある。3月上旬現在、かろうじて生き残っている状態である。

『百姓伝記』の評価

今、この寒空の下で春のように咲いているヤマカブラの菜の花を見ると、下切を教えてくれた永井邦太郎さんを思わずにはいられない。永井さんには、「昔からこうやってきた、これが余呉のやり方だ」と下切を教えてもらった。それで他の人たちにも聞くと、「根拠のない昔のやり方」という感じの答えが返ってきた。だから永井さんの言葉がなかったら、私たちは下切の存在にもたどり着けなかったかも知れない。

もちろん同時に、下切を書いている『百姓伝記』の締めくくりの言葉、「ためして知るべし」も思い出す。現在は、カブの自家不和合性は遺伝子のレベルでメカニズムが分かっている。だが、農家にとっては、よい個体を選びその種子をとってよい野菜をつくるサイクルを、<自らの手でやれる方法>のほうが重要である。

早咲きの花がしっかり結実し、美味しいヤマカブラを生み出すかどうか。その種を採るときも、種を蒔く今年の焼畑も、待ち遠しい。

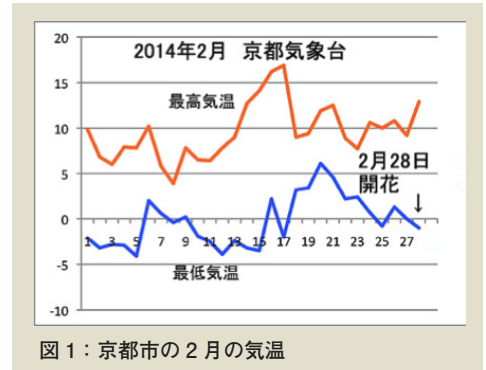


図1：京都市の2月の気温



写真1：2月28日開花1



写真2：2月28日開花2



写真3：3月9日 左上の小さい花が咲いたヤマカブラは下切個体。右下の赤い線が示すのは下切していないヤマカブラ

亀岡の農業と自然 (12)

～保津川の川魚漁と魚食文化 (1)～

京都学園大学 大西信弘
NPO 法人ふるさと保津 吉田 実

保津では、大雨の後に川から魚が入ってくる水田を「じゃこ田」と呼び、水田漁労の場でもあった（保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2011a）。しかし、亀岡では、昭和30年代後半から昭和40年代にかけて、水田周辺での漁労活動が下火になっていったという。当時、毒性の強い農薬を使い背骨の曲がった奇形の魚が捕れるようになり、気持ち悪くて食べなくなっていったそうだ。京都府・亀岡のすすめる「かわまちづくり」では、保津川の高水敷を利用して、地域の農・農の周辺にある自然・その利活用を復活させることで、「保津川の氾濫がもたらした肥沃な土地での農業の営みと田の中で育つ魚の稚魚たちの姿を再生（保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2011b）」し、地域の農と自然のシンボルとして活用していくことが地元の狙いだ。今でこそ、高水敷は利用されていないように多くの人が思っているだろうが、昭和50年（1975）頃は、現在の高水敷のあたりは水田で、保津川の川辺いっぱいまで水田が広がっていた（保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2011a）。だからこそ、「じゃこ田」が成り立ちえたのだろう。水につかる土地も活用して稲作をしていたのかと思うと、たいへん感慨深い。こうした歴史と文化が再生されると、その影響は自然にも広がって行きそうだ。日本の淡水魚には水田周辺で繁殖するものがある（斉藤ら、1988）ので、繁殖地として利用可能な水田周辺環境が整備されることで、周辺地域への魚の供給源になることが期待できるのではないだろうか。

保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議（2011b）は、「地域の食文化を改めてふりかえり、今後の産品開発の可能性を探ること、保津町や亀岡市の次の世代に伝えていくことをねらい」として、「地域に伝わる食事とくらし」「保津川の川魚料理と魚食文化」「保津町に伝わる行事食」など、「ざいちのち」の聞き取り調査を行っている。「保津川の川魚漁と魚食文化」は、「じゃこ田」を再生していく上で重要な「ざいちのち」だ。2011年3月8日に、2時間に渡って行われた聞き取り調査の結果を紹介したい。当日は、保津町のNさん（84才：年齢は聞き取り時）、Fさん（81才）、Kさん（75才）、Sさん（72才）、Tさん（67才）の5名に聞き取り調査に参加していただいた。じゃこ田にまつわる話、漁法に関する話、魚種ごとのとり方・食べ方についての話の3つのエピソードについて紹介する。

■「じゃこ田」について

ごいた（五寸板をならべた堰板）。ごいたを並べて、用水路の水位を上げて田に水を入れていた。普通は、ごいたを閉めておく。魚をとるときは、水口を閉めて、下もすこし閉めて水がはいらないようにして、ごいたのところの1mほどの落差で水を抜く。

60坪くらいの田んぼで10kgくらいとれる。25センチくらいのコイ、人差し指太さのウナギ、60cmくらいのナマズなどがとれる。田植えをして濁った水があると、ナマズが2匹も3匹もいる。ヤスでは、1匹しかとれない。残りは、たたいてとる。5月の末でも良い雨が降ったら、ナマズがあがってくる。

電池（懐中電灯）をもっていく。溝にもよるけど、田のこしらえてなくても、畝になっているところにあがってくる。田植えた後やったら広くてとりにくい。畝立てして、代掻きした後、良い雨が降って、産卵期だったら、とりにいく。電池でなく「がんどう」でとりにいった。竹に油を15センチくらい入れて、布をきつくつめた。松の根：松根（しょうこん）。松の根を削って束ねて松明にする。これは長持ちする。昭和30年代頃までのこと。



写真：とれた魚は写真のように燻製にして保存食にもされていた。

引用
斉藤憲治・片野修・小泉顕雄、1988、淡水魚の水田周辺における一時的水域への侵入と産卵、日本生態学会誌、38: 35-47
保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2011a、保津川すいたん農園前河川敷基本計画地域住民提案じゃこ田ミュージアム
保津町自治会保津町まちづくりビジョン推進会議、2011b、保津町のまちづくりと産品づくり

農具（6）：百姓の道具は生活の基 押し切りと役牛の飼育

守山 FS 藤井美穂

農具について A 氏（1926 年生）を中心に、在所^[1]の方々に協力をさせていただき、調べている。本ニューズレターでは農具を系統的に分類して、歴史的に記述することよりも、調査における「臨場感」すなわち農具について語られることや農具の使い方の実演の様子なども述べるように心がけている。農具の話から様々な過去の経験が話されることも多い。今回は押し切りと役牛の飼育について紹介する。

日頃から、A 氏は古い農具について集落の人々に声をかけてくれている。A 氏に農具の知らせが入ると、A 氏と筆者は日程を調整して農具がある家に行き聞き書きを行っている。それをニューズレターに記載している。農具の使い方について、A 氏は実演して説明してくれる。「見せただけでは分かんないので、説明して、使い方を見せることによって、『あ～ほうかいな』と分かる。聞いたもんも、答えが早くわかって、頭に浮かぶと思う」（A 氏）。

・押し切り（おしぎり）

押し切りはワラを束にして、適当な長さに切る道具である（写真 1）。木の台（長さ 50～70cm、幅 15cm）に受け刃が設置されている。台を片足で踏んで、柄（約 30cm）を上げてワラを受け刃にのせて、柄を一気におろして切る。ワラが切れると、柄の先についた 2 枚の鉄の板は刃を挟む構造になる。重宝な道具で、在所の各家に一台あった。押し切りで約 5cm ワラを刻んで牛のエサを作った。他に、ワラを押し切りで 3 つ切りにしてシキワラにしたり、家を建てる際に、土壁に混ぜるワラを押し切りで 3cm ほどに細かく刻んだりした。



写真 1：押し切り
台の長さ 63cm、幅 15cm。刃 30cm。柄の長さ 20cm。

「土壁は左官屋がするのやけど、その家の世襲とかで、『今日は壁土持ちや』というて、手の回る重親類（おもしんるい）の家^[2]がワラ

切りしたり、壁泥（土）を運んだりしたんや」（A 氏）。また、ワラの他に、マゴモ^[3]、ヨシ^[4]など木の枝以外のものを押し切りで切った。



写真 2：オシキリの使い方を説明する A 氏

A 氏が子供の頃（昭和 11 年頃）、オジイ（祖父）が役牛を飼育していたため、押し切りは「いっしゅく」（常時）、馬屋にあった。男の手のあいてるもんが 2 日分くらいの牛のエサになるワラを押し切りで切っていた。A 氏の祖父は滋賀県と野洲郡^[5]のそれぞれの牛の品評会で一等賞をとっていた。

「ええ牛にしようと思てオジイは世話してたな。他の家の牛は痩せて尻ベタについたババ（糞）が乾いてバリバリになってた。オジイの牛は毛がピカッと光ってた。家で作った二つのミソ壺のうち、一つを全部牛にやってたのがばれたこともあったな」

野洲などの在所の近辺に住む馬喰（役牛の売買をする人）が但馬のコボ（子牛）をつれてくると、A 氏の祖父は一年間でコボを飼育して田の耕作を教えた。冬には、道でコボに石を引っ張らせたりして調教した。春の田の耕作と秋の収穫にコボを使って、暮れに馬喰に売った。馬喰から「オイ」という手数料をもらった。

コボに「チャー」とかけ声をかけると左に曲がり、手綱を右に引っ張ると右に曲がり、「オー」と呼びかけると止まるように教えた。

牛を田で耕作させる人を「マゴ」と呼んだ。

「牛は『マゴ』が『気の走っている人』（賢い人）か『気のゆるい人』（呆けた人）かを見よる。気のゆるい人が牛を使いよると、耕作してくると曲がる時に、決まるところと寝よる」。

在所では、昭和 39 年頃まで、田を耕すために牛が飼われていた。その頃まで押し切りが使われていた。押し切りは役牛の飼育の消滅とともに使われなくなっていった。

注釈

[1] 滋賀県守山市洲本町開発（かいぼつ）

[2] 二等親の親族のことで、主に兄弟姉妹の家を指す。

[3] 水中に生えている藻のことで、堆肥にした。

[4] ヨシは屋根を葺く際に用いた。

[5] 1879 年（明治 12 年）に行政区画として発足し、2004 年（平成 16 年）に消滅。現在は野洲市、守山市、近江八幡市の一部の区域になる。

目指すはドバイ

奈良女子大学文学部 浅田晴久

筆者が継続的に調査を行っているアッサム州はインドの北東部にある。アッサム茶は世界的に有名であるが、現実のアッサム州は紅茶が醸し出す優雅なイメージからはほど遠い、貧しい辺境地域である。今回はこの地域に暮らす住民、なかでもよその地域から移住してきたムスリム(イスラーム教徒)住民の暮らしを調べるために、アッサム州中部のナガオン県を訪れた。

ナガオン県はアッサム州の中でもムスリムの移民人口が特に多い地域である。ムスリム住民がアッサム州にやってきたのは歴史が古く、今に始まったことではないが、バングラデシュが独立を果たした1970年代以降急速に人口が増えているという。朝ホテルを出て村までレンタカーで向かう道中、口の悪い運転手は、ムスリムの住民は知らぬ間に住みついて豚の子のように子供をたくさん産むから、そのうちアッサム州はムスリム住民の州になってしまうとこぼす。よそからやってきた彼らがアッサム州の富を奪いつくすために自分たちはいつまでも貧しいのだという言説である。これは彼だけでなくアッサムに古くから住むヒンドゥー教徒住民の本音である。

村に到着したので彼らの暮らしぶりを見てみよう。若年層が増えているという話を聞いていたが、村の中を歩いても若者の姿はどこにも見かけない。これまでに訪れたヒンドゥー教徒の村では10代から20代の若者たちが日中から路上に座り込んでトランプに興じたり、クリケットで遊んだりする姿が目についたものだが、ここでは働きもせずブラブラしている若者は皆無である。実は村の若者はみな南インドのケララ州に出稼ぎに行っているのである。驚いたことに村の若者の7-8割までもが出稼ぎの経験があるという。筆者の調査を手伝ってくれた大学生のS君も高校を卒業した直後に1ヵ月半ケララに行ってきたそうだ。

彼がいきいきと話すケララの情景はここアッサムとはまるで別世界だ。まず内陸のアッサムにはない海がある。インドに昇った太陽が沈むアラビア海である。海沿いにはヤシの木が生え、国内外の観光客が海水浴を楽しんでいる。人々の教育水準は高く、怒鳴り散らす者などいない。給料はアッサムの倍以上で、製薬会社や製材工場で警備員として働くだけで1ヶ月3万ルピー(約5万円)もの大金が手に入る。彼はケララで働いている友人のもとに

1ヶ月滞在した後、ムンバイやデリーなど大都市を一通り見て大学が始まる前にアッサムに帰ってきたという。

翻って生まれ故郷のアッサムときたら、道路は埃っぽくて家もみすぼらしい。若者がコネと賄賂なしに就ける仕事なんてどこにもないし、街ではデモや暴動が頻発している。自分たちは常にヒンドゥー教徒たちから厄介者扱いされる立場にある。何よりここには刺激がなく人生が退屈である。彼の夢は、いつかケララからアラビア海を越えた先にあるサウジアラビアやドバイへ行くことである。すでに彼の知り合いが働いており、あながち夢で終わる話でもない。チャンスがあれば日本にも行きたいと筆者にも念を押してくる。

彼らは出稼ぎ先で蓄えた資産を元手に新たにアッサム州内で土地を購入して自分のビジネスを始める。少数派の移民のつましやかな暮らしぶりを調べるつもりであったが、彼らは国際的なセンスを持ったビジネスマンであった。今やナガオン県ではムスリム住民が多数派であるという。



写真1：ムスリムの村の子供たち
(2013年8月 筆者撮影)



写真2：ケララの海水浴場
(ケララ州観光局 HP より)